

# 万葉集2682番歌の「韓衣君に打ち着せ」の解釈について

竹生 政資<sup>1</sup>, 西 晃央<sup>2</sup>

## An Interpretation of the First and Second Phrases of the 2682th Poem in Manyo-shu

Masasuke TAKEFU, Akihiro NISHI

### 要 旨

万葉集2682番歌「韓衣 君にうち着せ 見まくほり 恋ひそ暮らしし 雨の降る日を」は、ある女性が韓衣に寄せて恋愛の気持ちを詠んだ歌である。一見やさしそうに見える歌であるが、実はいくつか問題がある。その一つは「韓衣 君にうち着せ」の解釈である。通説では、この「韓衣」は男性用に仕立てられた着物だと解されている。韓衣は当時の大陸風の高級な着物であるが、こうした着物で着飾るのはたいてい女性であり、またこのような恋愛歌の中に詠み込まれている韓衣であるから、女性用の色鮮やかな着物と解すべきではなかろうか。本論文では、このような視点からこの歌を再検討し、この歌の韓衣が女性用であることを論証する。

### 1. はじめに

この論文で取り上げる万葉集2682番歌は、万葉集卷十一に収録されている相聞歌の一つである。万葉集の相聞歌はそのほとんどが男女の恋愛に関する歌であるが、2682番歌もまたその一つであり、韓衣に寄せて詠まれた、いわゆる「寄物陳思（物に寄せて思ひを陳べし歌）」の歌である。本論文の目的は、この歌の「韓衣」が男性用であるという従来の解釈を再検討し、結論としてそれが女性用であることを示すことである。そこでまず、歌の内容（訓読文）を新日本古典文学大系本に従って掲載することから始めよう<sup>[1]</sup>。

11/2682 韓衣 君にうち着せ 見まく<sup>ほ</sup>り 恋ひそ暮らしし 雨の降る日を

次に、先行研究の概要を知るために、代表的な万葉集注釈書に掲載されている訓読文、現代語訳、注釈を出版年の新しいものから順に掲載する。記載形式をそろえるため内容に影響を与えない範囲内で順序や記号表記などを一部変更し、漢字の旧字体は新字体で置き換えた。

<sup>1</sup> 佐賀大学 医学部 地域医療科学教育研究センター (takefu@cc.saga-u.ac.jp)

<sup>2</sup> 佐賀大学 文化教育学部 理数教育講座 (nishia@cc.saga-u.ac.jp)

①新日本古典文学大系<sup>[1]</sup>

【訓読文】 韓衣からころも 君にうち着せ 見まくほ欲り 恋ひそ暮らしし 雨の降る日を

【現代語訳】 韓衣をあなたに着せて、その姿を見たいと思ひながら、恋いこがれて暮らしした。雨の降る日を。

【注釈】 第四句「恋ひそ暮らしし」は係り結びで句切れ。「韓衣」は舶来上等の衣。「雨の降る日を」、「農耕のできない雨の日を、当然来そうなものとして、一日中、待ち懂れていたというのは、庶民生活の実際に深く喰い入ったものである」（窪田『評釈』）。

②新編日本古典文学全集<sup>[2]</sup>

【訓読文】 韓衣からころも 君に打ち着せ 見まくほ欲り 恋ひそ暮らしし 雨の降る日を

【現代語訳】 韓衣を あなたに着せてあげ それを見ようと 思って暮しました 雨の一日じゅう

【注釈】 韓衣 → 二一九四。ここは恋人に着せるために仕立てた衣装。○君に打ち着せ見まく欲り——この見ルは仕立下ろしの服を着た男の姿を見ることをいうか。あるいは試みる意で、ゆきたけ 衿丈の具合を調べるために試着させることをいうか。

③講談社文庫（中西進）<sup>[3]</sup>

【訓読文】 韓衣からころも 君にうち着せ 見まくほ欲り 恋ひそ暮らしし 雨の降る日を

【現代語訳】 新たに作った韓衣をあなたに着せて見たいと思ひ、恋いつづけて一日をすごした。雨の降る日に。

【注釈】 韓衣——カラは唐も韓もいう。外国ふうの衣服。今作者が作った。→ 二六一九。

④萬葉集註釈（澤瀉久孝）<sup>[4]</sup>

【訓読文】 韓衣からころも 君に打ち着せ 見まくほり 恋ひぞ暮らしし 雨の零る日を

【現代語訳】 仕立てた唐風の着物をあなたに着せて見たく願ひ、あなたを待ちこがれてくらししましたよ。雨のふる日を。

【注釈】 韓衣君に打ち着せ——「韓衣」は既出（六・九五二）。唐風の上等の着物の意。「内」は接頭語「打ち」。佐佐木氏「初二句は『見まく欲り』の序と見ることも不可能ではないが、実際のことと解する方が趣が深い」と云はれてゐるのに同感である。

【考】 古今六帖（一「雨」）「君にうちつけ見まほしみ恋ひてくらしぬ」とある。

⑤日本古典文学大系<sup>[5]</sup>

【訓読文】 韓衣からころも 君にうち着せ 見まくほ欲り 恋ひそ暮らしし 雨の降る日を

【現代語訳】 韓衣をわが君に着せて見たいと思ひ、雨の降る一日を、君を恋いつつ暮したことである。

【注釈】 韓衣——外国風の着物。

上に示した五つの先行研究を見ると、②、③、④は「韓衣」を作者（女性）が相手の男のために仕立てた男性用の衣服と見ている。一方、①と⑤は、この点に関して具体的な言及はしていないけれども、現代語訳から推測してやはり男性用の衣服と見ているように思われる。

次の第2節では、これらの先行研究の問題点について指摘し、続く第3節でこれらの問題点を解決できる新たな解釈を提案する。

## 2. 先行研究における問題点

2682番歌に関する通説には少なくとも四つの問題点がある。まず第一の問題点は、初句の「韓衣」を男性用とする点である。もしこの韓衣を単に「外国風の着物」として文字通り解釈するならば、通説が言うように「男性用の韓衣」があっても別に不思議はないかも知れない。しかし今の場合、作者はわざわざ「韓衣」という表現を用いているのであるから（五句のうち一句を費やして）、特別な着物であろう。その意味で、前節の注釈書①と④が韓衣を「舶来上等の衣」や「唐風の上等の着物」とコメントしているのは適切である。だとすれば、常識的に考えても、このような舶来の高級服で着飾るのはたいてい女性であり、しかも2682番歌のような恋愛歌の中にわざわざ意識して詠み込まれている韓衣であるから、女性用の色鮮やかな着物と解すべきではなかろうか。

ここで主観的なことを言っても始まらないので、まず万葉集中のすべての「韓衣」について調べてみた。万葉集には「韓衣」が全部で7例あるが、その中で単なる枕詞や掛け言葉として用いられているものを除き、実際の衣服であるものに限定すると、今問題にしている2682番歌のほかには次の一首があるのみである。

20/4401 韓衣 裾に取りつき 泣く子らを 置きてそ来ぬや 母なしにして

この歌は防人（信濃国の国造）の歌であるが、通説では、初句の「韓衣」は防人に対して国から給付された服（軍服）で、初句から第四句は「防人が自らの服の裾に取り付いて泣く子供を家に残して旅立って来た」と解釈されている。ところが、この通説には疑問がある。詳細は姉妹編の論文にゆずるが<sup>[6]</sup>、ここに結論だけを示すと、この歌の韓衣は防人の妻が夫を見送りに行くときに実際に着た着物であり、子供が幼いため見送りに連れて行くことができず、妻の韓衣の裾に取り付いて泣く子供を家に残して旅立ってきた、という内容である。もしこの解釈が正しければ、上の4401番歌は万葉集の「韓衣」が女性用であることを裏づける貴重な根拠の一つになる。

また、時代を万葉時代から古今和歌集の平安時代初期まで繰り下げてみると、古今和歌集に10首ある「唐衣」<sup>からころも</sup>の歌の中で、単なる枕詞や掛け言葉の例を除き、実際に人間が唐衣を着ることを念頭において詠まれた歌は次の一首のみである。

0410 唐衣 きつつなれにし つましあれば はるばるきぬる 旅をしぞ思ふ

伊勢物語の第九段「東下り」にも登場する在原業平の有名な歌である。各句の先頭音に「か・き・つ・ば・た」と花の名前が詠み込まれており、またいくつもの掛け言葉が巧みに詠み込まれているが、唐衣が女性（妻）の着物であることを暗黙の前提にしている。

このように、万葉集と古今和歌集には女性用として詠まれた「韓衣」（あるいは「唐衣」）の例が2つあるが、男性用である可能性があるのは、これから検討する2682番歌だけである。したがって、もし2682番歌の「韓衣」が女性用であることを示すことができれば（次の第3節で示す）、万葉集と古今和歌集を通して、少なくとも歌に詠まれた「韓衣」はすべて女性用だという結論になる。この結論は、平安時代以降の「唐衣」<sup>からきぬ</sup>がもっぱら女性用の衣装であることともつじつまが合う。ただし、奈良時代の「からころも」が平安時代以降の「からきぬ」とまったく同じものである保証はないけれども、表記の類似性から見て同系統のものであることは疑いないであろう。

次に第二の問題点として、「韓衣」は一般の女性が容易に作れるものだろうかという疑問がある。前節

の注釈書①と④が韓衣を「舶来上等の衣」や「唐風の上等の着物」とコメントしているところを見ると、韓衣は一般の着物などとは違い、専門職人が作ったものを大金を出して買うものではなからうか。だとすると、前節の注釈書②のような「恋人に着せるために仕立てた衣装」という解釈は成り立たず、第三句「見まく欲り」の「見る」も「仕立下ろしの服を着た男の姿を見る」や「<sup>ゆきだけ</sup>衿丈の具合を調べるために試着させる」などという解釈も成り立たなくなる。

第三の問題点は、第三句「見まく欲り」の「見る」の目的語は何かという問題である。第二句と第三句「君にうち着せ 見まく欲り」は、前節の注釈書③、④、⑤の現代語訳のように「君に打ち着せてみたいと思ひ」と解するのは適切ではない。なぜならば、「見まく欲る」という動詞は、万葉集に28例あるが（今問題の2682番歌は除く）、例えば「君が目を 見まく欲りして」（2381番歌）などのように「見る」の目的語はすべて名詞であり（歌に明示されていない場合でも文脈から判断する限りすべて名詞）、「韓衣を打ち着せてみたい」のように動詞の連用形に直接続く用法は例がないからである。これに対して、注釈書①と②は「韓衣を打ち着せて、韓衣を着たあなたの姿を見たい」のように「見る」の目的語を「韓衣を着たあなたの姿」と解している。この解釈だと、ほかの問題点を別にすれば、「見まく欲る」という動詞の用法には違反しない。

最後に、第四の問題点は、通説では結句「雨の降る日を」の説明がつかないことである。もし通説が言うように、この歌の真意が単に「彼に（男性用の）韓衣を打ち着せて、その姿を見たい」というのであれば、結句に「雨の降る日を」とあるのは不自然であろう。なぜならば、「韓衣を着せて見る」ことは彼が来さえすれば「いつでも」できることであり、また、以下の例が示すように、彼が来る可能性が高いのは晴れた日の月夜などであり、雨の降る日は例外的だからである。

- 04/0736 月夜には 門に出で立ち 夕占問ひ 足占をそせし 行かまくを欲り  
 04/0765 一重山 隔れるものを 月夜良み 門に出で立ち 妹か待つらむ  
 11/2618 月夜良み 妹に逢はむと 直道から 我は来つれども 夜そふけにける

したがって、今問題の2682番歌がもし通説が言うような内容のものであるならば、結句は「雨の降る日を」ではなく、「清き月夜に」などとなるか（彼が来る可能性が高いから）、あるいは「君を待ちつつ」や「君待ちかねて」などの一般的な内容になるのが自然ではなからうか。ところが、この歌では彼が訪ねてくる可能性の最も低い「雨の降る日」に「恋ひそ暮らしし」となっており、常識とは逆になっている。通説ではこの点がどうしても説明できないのである。この歌を正しく解釈するためには、なぜ結句に「雨の降る日を」とあるのか、この理由をうまく説明できなければならない。

### 3. 万葉集2682番歌の新しい解釈

この節では、まず新しい解釈の結果を示し、その後その根拠を示すことにしよう。まず2682番歌の訓読、直訳、意識を示す。

- 【訓読】 <sup>からころも</sup>韓衣 君にうち着せ 見まく<sup>は</sup>欲り 恋ひそ暮らしし 雨の降る日を  
 【直訳】 韓衣をあなたに打ち着せて、（あなたが帰った後にその韓衣を「形見」として）見たいと思ひ、  
 ずっと恋しい思いで過しました、雨の降る日を。  
 【意識】 今日はあいにく雨ですが、あなたが訪ねて来る予定の日なので、あなたが来たら、私の大事な韓衣を打ち着せて、あなたが帰った後、また次に逢えるまでの長い間、その韓衣をあなたの「形見」

として見たいと思ひながら、ずっと恋しい思ひで過しました、雨の降る日を。

新しい解釈のポイントは、この歌の「韓衣」はあくまでも女性用であり、それを彼が来た時に一時的に打ち着せると解する点である。なぜ彼女が女性用の韓衣を彼に打ち着せるのか、なぜ「雨の降る日」に逢えるのを期待しているのか、その理由については後で考察する。

さて、通説が2682番歌の「韓衣」を男性用だとする唯一の根拠は、歌の前半に「韓衣 君にうち着せ」とあることである。確かに、もしこの歌を「単独の歌」として解するならば、通説のような解釈になるのもやむを得ないかも知れない。しかし、この歌は万葉集編纂者が意図的に「雨」をテーマとする歌を五つ集めて配置した中にあることに気づかなければならない。そのことを考慮して初めて、この歌の正しい解釈ができるのである。以下に、一連の五つの歌を示す。

- 11/2681 わが背子が 使ひを待つと 笠も着ず 出でつつそ見し 雨の降らくに  
 11/2682 韓衣 君にうち着せ 見まく欲り 恋ひそ暮らしし 雨の降る日を  
 11/2683 彼方の 赤生の小屋に 小雨降り 床さへ濡れぬ 身に添へ我妹  
 11/2684 笠なみと 人には言ひて 雨つつみ 留まりし君が 姿し思ほゆ  
 11/2685 妹が門 行き過ぎかねつ ひさかたの 雨も降らぬか そをよしにせむ

上に示した五首はいずれも「雨」をテーマとした歌であり、今問題にしている2682番歌を含む最初の三首は、雨の中を濡れながら逢う男女の恋愛を詠んだものであり、最後の二首は雨をうまく口実利用する歌である。したがって、この一連の歌の配列を考慮するならば、2682番歌に込められた歌の心は、この節の最初に示した意識のようなものになるのではなかろうか。

ところで、この歌の作者はなぜ女性用の韓衣を彼に打ち着せたいと言うのだろうか。おそらく彼女は、自分の大切な韓衣を彼に打ち着せることにより、次に逢うまでの（長い）期間、その韓衣に彼の魂が乗り移っているもの（いわゆる「形見」）として、彼が帰った後にその韓衣を見ながら彼を偲ぶのであろう。このように考えるのには根拠がある。

- 11/2578 朝寝髪 我は<sup>けづ</sup>梳らじ 愛しき 君が手枕 触れてしものを  
 15/3733 我妹子が 形見の衣 なかりせば 何物もてか 命継がまし

最初の歌は、女の歌で、「愛しい彼の手枕に触れた髪だから、朝寝髪を櫛でけずったりはしない」という内容である。第二番目の歌は、男の歌で、「今まで生きて来れたのは我妹子の形見の衣があればこそである」という内容であり、「形見の衣」が命にかかわるほど大切なものだったことがわかる。特に最初の歌の「彼の手枕が触れた髪」は、今問題の2682番歌の「彼に打ち着せた韓衣」と対比させて考えることができるだろう。

さて次に、もう一つの問題を考えよう。なぜ2682番歌の彼女は自分の韓衣を彼に打ち着せて「形見」とする必要があったのだろうか。結論から言えば、なかなか逢えないからである。すなわち、一度逢ってから次に逢うまで「長い間」待ち続けなければならないからである。もし待つ期間が数日程度であれば、「形見」など必要ないであろう。しかし、逢えない期間が数十日あるいは数ヶ月以上も続く場合、現代の電話のような便利な通信手段のなかった当時であっては、相手を偲ぶために何らかの「形見」が必要だったことは想像に難くない。このことは、例えば、少し前に例を示した3733番歌の「我妹子が 形見の

衣…」の歌が、越前国に流罪になった中臣朝臣宅守が都の妻（狭野茅上娘子）にあてて贈った歌であることからわかる。

それでは、今問題の2682番歌の彼女の場合、どういう事情で「長い間」逢えないのだろうか。結論から言えば、世間のきびしい目があるために、彼が人目を避けて通って来れる機会が少ないからである。頻繁に逢うことのできる一般のカップルであれば雨の日は避けて晴れた日の月夜などに逢えばよいのであるが、今問題の2682番歌のカップルの場合、めったに逢う機会がないので、あらかじめ逢う予定にしていた日がたとえ雨でもその日に逢っておかなければ、今度また何時逢えるかわからないのである。このような考え方をするには根拠がある。それは、今の2682番歌の直前に配置された2681番歌が、問答歌の一つとして3121番歌に重出しているという事実である。以下に、その問答歌を示す。

12/3121 わが背子が 使ひを待つと 笠も着ず 出でつつそ見し 雨の降らくに

12/3122 心なき 雨にもあるか 人目守り ともしき妹に 今日だに逢はむ

【大意】心無い雨だなあ。（しかしそれでも）人目を避け、めったに逢えない妹に逢いに行こう。

最初の3121番歌は、女の歌で、雨が降るのに笠も着ないで外に出て彼からの使いを待っている、という内容である。一方、次の3122番歌は、男からの返歌で、今日はあいにく雨だが、人目を避けて、（世間のきびしい目があるために）めったに逢う機会のない妹のもとに、せめて今日だけでも逢いに行こう、という内容である。ちなみに通説は、3122番歌の結句を「今日だに逢はむを」と訓み、解釈も上に示したものと大きく異なっている。この歌の解釈については姉妹編の論文で詳しく議論しているのでそちらを参照されたい<sup>[7]</sup>。

上の3121番歌は「雨の降る日」に彼の使いが来るのを待つ女の歌であり、また、それと同じ（重出）歌である2681番歌の直後に配置された2682番歌もまた「雨が降る日」に彼が来るのを待つ女の歌であるから、この二つの歌は同じ女性か、あるいは同じ境遇の女性の歌である可能性が高いであろう。なぜならば、万葉集編纂者は関連する歌をまとめて配置する傾向があるからである。

以上に述べたことから、以下の結論が導かれる。まず第一に、2682番歌の彼女がなぜ「雨の降る日」に彼を待っていたのか。この間に対する答えは、世間のきびしい目があるために、ただでさえ逢う機会が少ないので、あらかじめ逢う予定にしていた日がたとえ雨でも、彼が何とか頑張って逢いに来てくれると信じているからである。この結論は少し前に示した3122番歌の解釈から導かれる。また、次のような似た内容の歌もある。

04/0664 石上 降るとも雨に つつまめや 妹に逢はむと 言ひてしものを

なお、3122番歌の作者（男）が、世間のきびしい目があるために妹と逢う機会が少ないことは、歌の中に「人目守り」や「ともしき妹」という表現があることからわかる。

第二に、なぜ彼女は自分の韓衣を彼に打ち着せて「形見」にしようとするのか。この間に対する答えは、一度逢ったら次に逢うまで「長い間」待ち続けなければならないからである。その待つ間、彼を偲ぶために「形見」が必要なのである。この結論は、前に示した2578番歌や3733番歌の解釈から導かれる。

最後に次のことを補足しておきたい。第1節の注釈書①で新日本古典文学大系は、2682番歌の結句に「雨の降る日を」という句がある理由に関連して、窪田空穂氏の「農耕のできない雨の日を、当然来そうなものとして、一日中、待ち憧れていたというのは、庶民生活の実際に深く喰い入ったものである」とい

うコメントを引用している。しかし、このコメントには二つの点で疑問がある。

一つは、この歌は果たして「農民」の男女の恋愛の歌だろうか。韓衣は経済力のある貴族階級の着物であろう。農民や庶民の女が着るものではない。実際、第2節に示した4401番歌の初句にも「韓衣」があるが、この歌の作者は信濃国の国造であり、もしこの韓衣がその妻のものだとすれば（通説は防人の軍服だとするが）、この韓衣は地方の有力貴族の女性の着物であることを示している。

もう一つの疑問は、歌の結句に「雨の降る日を」とあるのを、雨の日は農耕ができないから暇で男が女の元に来る可能性が高いと解しているようだが、百姓は雨の中でも蓑などを着て仕事をするものであり、また、女のもとに通うのであれば、わざわざ雨の日を選ばなくても、晴れた日の夜に通えばよいわけで、むしろその方が一般的である。雨の降る日に女のもとに通うのは、それなりの理由があるからで、その理由についてはすでに述べたとおりである。

#### 4. おわりに

本論文では、まず万葉集2682番歌の「韓衣」が男性用であるという通説の妥当性について再検討を行い、実はそれが女性用であることを示した。次に、第二句と第三句の「君にうち着せ 見まく欲り」について、通説のように「彼のために仕立てた韓衣を試着させてみたい（試着した姿を見たい）」と解するのではなく、「彼が来たときに自分の韓衣を一時的に彼に打ち着せて形見にし、彼が帰った後、次に逢うまでの長い期間それを見ながら彼を偲びたい」と解すべきことを指摘した。こうした解釈が妥当なものであるかどうか、多くの方々のご批判をあおぎたい。

#### 参考文献

- [1] 「万葉集 三」、新日本古典文学大系、岩波書店、p. 82、2002年。
- [2] 「万葉集③」、新編日本古典文学全集、小学館、p. 246、1995年。
- [3] 「万葉集 原文付全訳注（三）」、中西進、講談社文庫、pp. 72-73、1980年。
- [4] 「万葉集注釋 卷第十一」、澤瀉久孝、中央公論社、pp. 380-381、1962年。
- [5] 「万葉集 三」、日本古典文学大系、岩波書店、pp. 222-223、1960年。
- [6] 竹生政資・西見央、万葉集4401番歌の「韓衣」と「母なしにして」の解釈について、佐賀大学文化教育学部研究論文集、第16集第1号、pp. 51-60、2011年。
- [7] 竹生政資・西見央、万葉集3122番歌の「今日だに逢はむを」について、佐賀大学文化教育学部研究論文集、第16集第1号、pp. 35-41、2011年。